

第6回

佐世保鎮守府修理艦船繫留場 (立神係船池) —明治期日本海軍最大の土木工事—

長崎大学名誉教授 岡林 隆敏



立神係船池(修理艦船繫留所)

佐世保重工業(株)の海側に、四角に囲まれた巨大な岸壁が見える。修理する船を係留する「立神係船池」(当時の名称「佐世保鎮守府修理艦船繫留場」)で、今から100年ほど前の大正5年(1916)12月に完成した。

日本の西端にある佐世保海軍基地は、日露戦争以来、前線基地、補給基地、修理基地としての重要な役割があり、大規模な修理用ドックと係船池が要求された。

そこで、日露戦争当時、佐世保鎮守府建築科長

であった吉村長策は、立神係船池の計画を立案し、明治38年(1908)に工事訓令が発令された。

工事は明治39年(1906)4月に着工、真嶋健三郎が主任技師を務めた。海軍工廠前面の海面を堤防で囲み矢板作業、海水を排除した海底を掘削して平滑にし、明治44年4月から岸壁工事にとりかかった。鉄筋コンクリートで岸壁を乾作業で施工し、巨大なコンクリートの壁で囲まれた空間が構築された。大正4年3月に海水を再び導入し、大正5年(1916)12月に係船池は完成した。工事に着手後11年を要し、総工事は約3,000,000円となった。明治44年(1911)吉村長策転出後、主任技師は山内彌次郎に替わったが、設計・工事には建築科長となった真島健三郎の努力が注がれた。

立神係船池(修理艦船係留場)の概要は、長さ(東西)1900尺(575.7m)、幅(南北)1200尺(363.6m)、入口の水路幅360尺(169.68m)、岸壁の海底からの高さ52尺(15.75m)、水深(最大干潮面下)35尺(10.60m)となっている。全周は1,878m、面積約210,000㎡の巨大な係船池である。岸壁全周を取り巻く壁体の内部には幅4尺(1.2m)、高さ5尺(1.5m)の暗渠が巡らされ、電線、水道管、空気管などが収納できるようになっている。

明治期の土木技術史をまとめた『明治工業史・土木編』(編集長・田邊朔郎、昭和4年)には、「明治年間における我が海軍の最大の土木事業」として紹介されている。構造物の規模から、また工費の点からも、巨大な土木工事であった。この工事には、佐世保鎮守府で開発された、日本における最先端のコンクリート技術が投入されている。

入水式の「係船池」が右の写真である。岸壁上の人物と比べると、「係船池」岸壁の巨大さが実感できる。この巨大な海洋構造物を乾工事で行っている点に、陸上構造物と同様の、微動だにしない完璧な構造物の建設を目指した、真嶋健三郎をはじめ海軍土木技術者達の意気込みを見ることができる。



時事写真(大正4年3月15日)入水式の「係船池」